

教員養成課程における音・形・色を関連づける 表現プログラムの研究 —日本語と和楽器を用いて—

岡林 典子・山野 てるひ

1. 研究の背景と目的

平成29年3月に新たな幼稚園教育要領が告示された。これに伴い、教員養成を行う大学では質の高い幼稚園教諭を養成する教職課程を再編することが求められている。文部科学省の委託を受けた、無藤隆氏を代表とする一般社団法人 保育教諭養成課程研究会は、新しい幼稚園教育要領の趣旨を踏まえて幼稚園教諭を幼児教育の専門家として捉え、その資質能力の向上に向けて「領域に関する専門的事項」等のモデルカリキュラムを作成した¹⁾。その中の1つである「幼児と表現」のモデルカリキュラムには、全体目標において「幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能、表現力を身に付ける」ことが挙げられている。そして、「(1) 幼児の感性と表現」の到達目標の1つとして、「幼児の素朴な表現を見出し、受け止め、共感することができる」ことが記されている。また、「(2) 様々な表現における基礎的な内容」においては、一般目標に「身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする」ことが挙げられている。

日常生活の中でみられる子どもたちの多様な表現は、歌を歌うことや楽器を演奏すること、絵を描くことや工作することに限られるものではなく、身近な環境にある音や形、色などへの気付きや、人との関わりの中で感じる喜怒哀楽などの感情体験を基盤にして多様な媒体で生起している。保育者として子どもの気付きや思いに寄り添い、豊かな感性と表現を育むためには、子どもの内面を読み取ることや表現のプロセスに目を向けることに加え、保育者が自身の感性を高めることにも意識的になることが大切である。

音楽教育、美術教育を専門とする筆者らは、およそ10年前から教員養成段階における資質・能力の育成や、指導教材の開発の必要性を感じ、教員養成課程の学生が自身の感性を豊かに育み、指導者として高い資質と能力、表現力を身につけられるよう、継続して音楽・造形・身体結びつきを重視した表現教育のプログラム開発を行ってきた²⁾。

近年は筆者らのほかにも、教員養成における表現力の向上に目を向け、音楽表現・造形表現・身体表現の結びつきを検討する一連の研究がなされてきている。古市らの研究³⁾は、音楽、造形、身体、言葉の各教科に共通する核になるものとして「共感的要素」を置

き、それを基礎にして演奏力、造形力、演技力、読み聞かせ力など、各教科の技術及び表現力を効果的に伸ばそうとする試みである。それは、音楽と美術を含む4つの教科に共通する動機づけとなる共感的要素を探ってはいるものの、音・形・色・動きなどに対する感覚をつないで表現しようとする試みではない。また、教員養成における授業ではないが、小島（2011）は大学の教養科目の授業において、音楽の視覚化・図形化を一連の活動として行うことにより、音楽の理解の幅を広げようと試みている⁴⁾。

このように音楽・造形・身体表現が結びつく研究がなされてきている一方で、花輪（2016）は、「領域『表現』に関する科目（保育内容研究「表現」等）の教授内容においては、未だに音・図・体の枠組みが根強く、…総合的な指導として具体化するもしないも、保育者一人一人の受け止めと実践力に任せきりになっているのが現状とあってよい。今問われることは、保育者養成を考える場合、養成校の教員がそれぞれの専門性を踏まえながらも、保育とは何か！と言った自身への問いを共通した視座とせねばなるまい」と指摘しており⁵⁾、新しい教育課程の再編が求められる中で表現教育においても、音・形・色を関連づける表現プログラムの検討は不可欠な課題である。

新教育課程の「領域及び保育内容の指導法に関する科目」の編成は、「どのような幼稚園教諭を育てるか」「どのような学問的基盤や幼児教育に関わる専門性をもった教員がいるか」により、それぞれの大学の養成課程の創意工夫にゆだねられている⁶⁾。京都女子大学発達教育学部では、2019年度の入学生から新教育課程が始まり、筆者らは2020年度から新たに領域「表現」に関わる「保育内容の指導法」の授業に携わることになっている。

そこで本研究では、2019年度に発達教育学部児童学科の2回生に開講された「保育内容演習（音楽表現）」（岡林担当）と「児童図工Ⅰ」（山野担当）の授業から、「日本語」と「和楽器」とを用いて、音・形・色を関連づけて実践した授業内容を取り上げ、学生がどのような学びや気づきを得たのかを、学生の表現と「振り返りシート」を基に考察することを目的とする。

2. 研究の方法

2.1 対象とした授業の概要

本稿では発達教育学部児童学科の「保育内容演習（音楽表現）」と「児童図工Ⅰ」を分析対象とする。「保育内容演習（音楽表現）」は幼稚園免許及び保育士資格必修科目である。2年次前期に4クラスに分けて開講しており、各クラスを初回オリエンテーションを除いて、岡林とガハプカ奈美氏が7回ずつ担当している。

「児童図工Ⅰ」も幼稚園免許及び保育士資格必修科目である。2年次前期に4クラスに分けて開講しており、初回オリエンテーションを除き、山野と津野充聡氏が2クラス7回ずつを担当し、矢野真氏と沖中重明氏が2クラス7回ずつを担当している。

表1 「保育内容演習（音楽表現）」7回分の授業計画

	授業内容
第1回	オリエンテーション
第2回	サウンドスケープ — キャンパスの「音聴き歩き」
第3回	サウンドスケープ — 音日記の確認 ・絵本『もりのおとぶくろ』の実践VTR（A幼稚園5歳児）を参考にして、音環境を取り入れた保育内容を考える
第4回	子どもの音楽表現 — 日常生活に見られる子どもの音楽表現の特徴について知る
第5回	日本語のリズム — その特徴と面白さを知る ・絵本『かぞえうたのほん』の《いーいーいーかぞえうた》の実践VTR（B幼稚園4歳児）を参考にして、日本語の音楽性を取り入れた保育内容を考える
第6回	日本語のオノマトペと音象徴 — その特徴を知る ・絵本『かっきくけっこ』の実践VTR（C幼稚園5歳児）を参考に保育内容を考える
第7回	オノマトペと動き — 絵本『だるまさん』を教材として、オノマトペと動きが関わる保育内容を考える
第8回	和楽器の音を描く — 和楽器（鉦、太鼓、拍子木）の音をコンテパステルで描く ・和楽器の音を描く保育実践より、子どもたちの表現の特徴を知り、違いに気づく

2.2 「保育内容演習（音楽表現）」と「児童図工I」の授業内容の関連性

「保育内容演習（音楽表現）」と「児童図工I」はいずれも児童学科2回生前期に開講されている。本稿で対象とするクラスの学生は、「児童図工I」において山野の絵本教材『かっきくけっこ』を用いた感覚連合の授業を先に受講し、その後に岡林の第6回以降の授業を受講する流れとなっている。表1に「保育内容演習（音楽表現）」の岡林が担当する7回の授業計画を示した。

そこで、本稿では山野の授業を3章で述べ、4章で岡林が行った「保育内容演習（音楽表現）」の第6回「日本語のオノマトペ・音象徴について」と第8回「和楽器の音を描く」の授業について述べる。

3. 絵本『かっきくけっこ』を題材とした「児童図工I」の授業

「児童図工I」は保育の内容の理解と方法に関する演習科目である。幼児の造形活動を指導者として適切に支援することができるよう、幼児と共通する材料を用いた平面や立体等の基礎表現を通して子どもの造形表現への理解を深め、保育指導能力を高めることを目標としている。

筆者らは長年の幼児の表現の実践研究に基づき子どもが遊びの中で音と形・色・手触り、動きの繋がりを感じられる絵本を108冊選定して教材化してきた⁷⁾。『かっきくけっこ』は、その中の1冊で2009年にくもん出版から「ことばとかずのえほん」シリーズとして出版されたものである。一見知育・学習絵本のように見受けられるが、作者の谷川俊太郎は、子どもに50音に親しみをもたせながら50音の意



谷川俊太郎・さく 堀内誠一・え
くもん出版 2009年

味だけではない言葉の音の多様性が子どもの耳を開くのだという。自由に声に出し、身体も動かして大人も子どもと一緒に遊ぶことを期待すると語っており、子どもの感覚や感性を耕すことを主眼としている。

本授業は言葉と音とイメージの結びつきを学生が自らの体験を通して思考し、知識や技能、判断力・表現力を身に付けるとともに、幼児の言葉や身ぶり、描画表現に対する理解を深めることがねらいである。

3.1 授業の実践内容

日時 2019年6月27日・7月4日（2コマ×2） 対象 児童学科2回生29名

(1) 色彩に対する基礎的な知識と混色の技能を身につけ、描画材の特徴を生かした表現操作が可能になるように事前に色の三属性の知識や色相環のイメージを持たせた上で、ポスターカラー、パス、コンテパステルを使った混色練習を行った。

①幼児用ポスターカラー（赤・黄・青の三原色と白・黒の無彩色の5色）：4名のグループで混色により12色相環とそれぞれの色のライトトーン12色、ディープトーン12色の計36色の色彩カード（約13cm×19cm）36枚をスポンジローラーを用いて作成する。

②パス12色セット、コンテパステル12色セット：個人でそれぞれの描画材の混色により12色相環（写真1）を2種作成する。

(2) 絵本『かっきくけっこ』の表紙画を提示し、50音の音を音声にして音の感覚を感じ取ることを説明する。

(3) 50音の各行を書いたプリントを配布する（表2）。4名1グループでそれぞれの行の音の違いを意識して音声に表し、リレーで読み合う。他者の表現から自分の表現方法を工夫する。

(4) 読みあった10種の行の中から音の形や色のイメージが明瞭な行を1つ選び、八つ切り画用紙にコンテパステルを使って描く。

何の行を描くかは周囲に告げず、画用紙の裏面に描いた行を記入しておく。

(5) 4名で自分の描いた行の絵を見せ合い、描いた行を当てあう。そのように感じた根拠を形や色、筆触などの造形的特徴から話し合う。

(6) 作者が描いた行を明かし、表現の意図や工夫を話す。

(7) 黒板に全員の描画を行の種類ごとにまとめて掲示し、特徴や傾向があるか、気づいたことをクラス全体で意

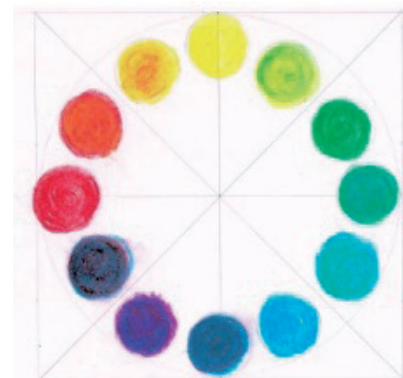


写真1 コンテパステルの混色による12色相環

表2 配布した50音の各行を書いたプリント

・あ	い	う	え	お					
・か	っ	き	く	け	っ	こ			
・さ	さ	し	し	す	せ	せ	そ		
・だ	お	づ	で	ど	ど	ど			
・な	ー	に	ぬ	ね	ー	の			
・ば	っ	び	っ	ぶ	べ	っ	ぼ	っ	ぼ
・ま	み	む	め	め	も				
・や	ー	い	ゆ	え	よ	ー	よ		
・ら	ら	ら	り	ら	ら	れ	ら	ら	
・わ	い	う	え	お					

見交換する。

- (8) 『かっきくけっこ』の絵本を開き、それぞれの行の場面を初めて確かめる。
- (9) 音声にはそれを含む特定の語の固有の意味とは別の象徴的な意味を示唆する音象徴 (sound symbolism) があることをプリント資料 (8頁、表3) で解説し、(7)(8)で意見交換した言葉の音と造形の連関性に音象徴が関与していることに気付かせる。

3.2 結果と考察

受講生29名の中で、当該絵本をこれまでに読んだ経験のあるものは皆無であった。『かっきくけっこ』の絵は絵本作家として著明な堀内誠一が手掛けており、当然のことながら作家自身の行の音のイメージが表されている。しかも具体的な事物や情景の場面が多い。従って受講生全員が絵本の内容を知らなかったのは、先入観を持たずに自身の音の形や色のイメージを探究する学習に好都合であった。

当初、学生たちは戸惑いを見せ50音の行を音声にすることを躊躇していたが、何度か順番が回ってくるうちにイメージが湧き、楽しんで積極的に声に出している様子が伺えた。例えば長音や字間の空間の有無への意識、有声音、無声音の使い分け、語気の強弱など、グループのメンバーの表現を聞きながらすぐさま自身の表現方法にフィードバックすることができていた。

学生が描画の対象として選んだ行は、「あ行」3名、「か行」4名、「さ行」2名、「な行」3名、「ば行」8名、「ま行」2名、「や行」4名、「ら行」3名という結果で、好む音や描きやすい音に傾向が見られる。描画の1/4 (27.5%) を占めた「ば行」の「ばっぴっぷべっぼっぼ」を構成する両唇破裂音 /p/ は「張った表面の破裂」や「辺りに広がる事態」、「突然の事態」のイメージを喚起させる音である。しかも「ぼっぼっぼ」と最後に同じ音が重複することから連続して同じ運動が繰り返されている感覚が印象的で、10行の中で最も運動感覚が明瞭な音である。そのため多くの人が画像を想起しやすい。張った表面を思わせる○状のものが次々と現れたり、花のように放射状に広がったりする状態が描かれた (図12～図17)。「あ行」の母音は3名ともに円を原型として描き、口の開き方や長音を形に、それぞれの音にイメージされる色彩を対応させている (図1～図3)。「か行」は鋭さや固さを皆、鋭角的な線と黄色や彩度の高い色で表した (図4～図6)。「さ行」 (図7・図8) と「な行」 (図9～図11) は非常に類似する表現となっているが座席が隣あった訳ではない。/s/ の軽さや摩擦は軽い線の集積と緑色に、/n/ の粘着性や捉えにくさが曲線と紫色にと、強い共通の造形イメージがあることが伺える。紙幅により「ま行」から「ら行」の描画については割愛するが、学生は混色練習による体系的な色のイメージの下に、50音の自らの音声表現を工夫する体験を経て、描画を通して音と造形の結びつきを実感をもって学んだと考えられる。

〈学生の描画〉

あ行



図 1



図 2



図 3

か行

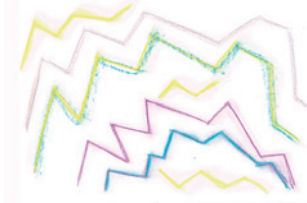


図 4

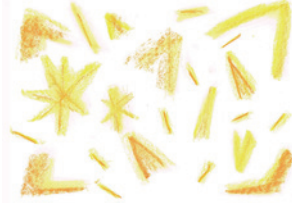


図 5



図 6

さ行



図 7



図 8

な行



図 9

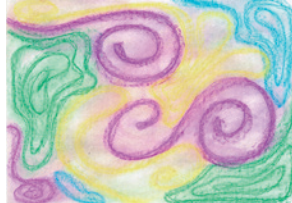


図 10

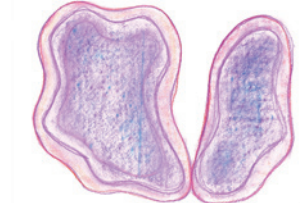


図 11

ぱ行



図 12

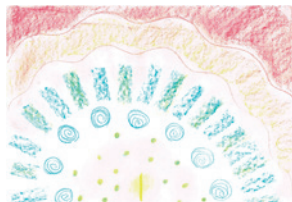


図 13



図 14



図 15



図 16

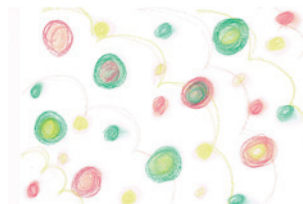


図 17

ま行



図18



図19

や行

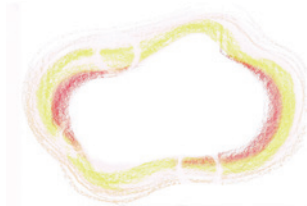


図20



図21



図22

ら行



図23

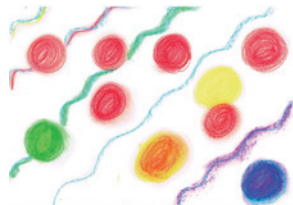


図24

4. 日本語と和楽器を題材とした「保育内容演習（音楽表現）」の授業

「保育内容演習（音楽表現）」は音楽的な表現を核としながらも、それを支える自然環境や社会環境、また身体的、音楽的、言語的表現とのつながりを感じ、保育者として幼児の総合的な表現の指導を行える基礎的な知識と実践力を養うことを目標としている。表1に示した7回の授業内容から、日本語と和楽器を題材にした授業について述べる。

4.1 「日本語のオノマトペと音象徴—その特徴を知る」の実践内容

日時 2019年7月8日 対象 児童学科2回生29名

- (1) 「とぶ（跳ぶ・飛ぶ）」に関わるオノマトペを、動きの大きさに分けてイメージし、様々に考えて書き留める。
- (2) オノマトペと動きの関係を知るために、(1)で挙げたオノマトペを声に出して動く。
- (3) テキスト⁸⁾を参考に音象徴の意味を理解する。

授業では、オノマトペを考えて動いた後、日本語の音のもつ特徴「音象徴」について表3を参考に説明を行った。例えば「かくかく」というオノマトペに角張った感覚を覚えるのは[kaku - kaku]という音に硬い表面との接触を感じる音象徴をもつ音素/k/が繰り返して使われているからなど、テキストの内容に沿って学びを深めた。また、音象徴をより理解するために関連する絵本⁹⁾や書籍¹⁰⁾を紹介した。

表3 50音の行の音をもつ音の特徴

50音の行	音素	音象徴
か（喉音）	/k/ /g/	硬い表面との接触を表わす音や様子
さ（舌音）	/s/ /z/	滑らかさ、軽い接触 摩擦、小粒の動き、流動する液体、静けさ、穏やかさ
た（舌音）	/t/ /d/	打撃の関連、木材、床、地面
な（舌音）	/n/	つかみどころがない、実態がはっきりしない
は（唇音）	/h/ /p/ /b/	空気の流れ、息、頼りなさ、弱さ、繊細さ、美しさ、優雅さ 細かい、小さい、軽い、物体に打ち当たる、破裂する、急で爆発的な動作や出来事 出来事の前提である緊張、突然生、力強さ
ま（唇音）	/m/	はっきりしない様、抑圧
や（喉音）	/j/	揺れや頼りなさ、輪郭がはっきりしない状況
ら（舌音）	/r/	幸せて高揚する気持ち、回転、流動的な運動
わ（唇音）	/w/	人間や動物の発する声や音
ん	/N/	共鳴 反響した連続音

（浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ』 p. 40の表を基にして作成）

4.2 「和楽器の音を描く」実践内容

4.2.1 方法

日時 2019年7月22日 対象 児童学科2回生29名

- (1) 第8回の授業では、学生たちにはあまりなじみのない和楽器の音を提示して、形と色に表すことを試みた。受講生各自にコンテパステルと、縦12cm×横17cmの白画用紙を3枚ずつ配り、岡林が楽器を隠して、鉦（かね）・太鼓・拍子木を数回打ち、学生たちは楽器の音を聞き、イメージを広げて画用紙に色や形で描いた。3つの楽器の音を描き終わると、鳴らした楽器を明示してホワイトボードに全員の絵を貼り、互いの表現を比べて、気付きと感想を述べ合い、振り返りシートに記入した。



図25 使用した3種類の和楽器

- (2) 以前5歳児に試みた同様の保育実践における表現¹¹⁾を提示し、学生との違いについての気付きを話し合った。
- (3) 数種類の和楽器（締太鼓・平太鼓・祭り太鼓・チャップパ・鉦・拍子木・鳴子）の音を聴き、それぞれの音をオノマトペで表し、ワークシートに書き入れた。
- (4) 締太鼓や鉦の基本的な口唱歌を覚えて唱え、それを基に和楽器の音を合わせて、お囃子の演奏を試みた。

【描画に和楽器の音を用いた理由】

- ① 音から形や色のイメージを広げるために、既知の楽器のイメージの影響を受けないよう普段あまり触れることのない和楽器を用いることにした。
- ② 5歳児の表現と比較するために、同様の楽器を用いた。

4.2.2 結果

学生たちが描いた和楽器の音を、それぞれの楽器についてみていく。

■「鉦」の音の描画について

図27は学生たちが表した「鉦」の音の描画で、図28は5歳児の描画である。図27では高音で金属質の硬い鉦の音は黄色や黄緑、明るい灰など、高中明度の色が多く用いられている。音高と色彩の連関に加え、鉦の残響が線の重なりやぼかしなどで表されている。硬い高音を表す形は、直線やジグザグ線、尖った3角形や主として右に高く傾斜する方向などで示されている。

図28の5歳児では、同様に黄色や黄緑、水色等の高中明度の色の面積が多く、高い音高では高い明度を使用する共通性が見られる。



図26 鉦



図27 学生が表した「鉦」の音の描画



図28 5歳児が表した「鉦」の音の描画

■「太鼓」の音の描画について

図30は学生たちが表した「太鼓」の音の描画で、図31は5歳児の描画である。学生の描画の色彩では殆どが茶（赤は茶と同色相）から黄土系、及び灰色の選択がされて、形は円か円の運動ともいえる螺旋が用いられている。学生たちは残響の少ない短音の繋がりとして

もに音源が太鼓であると推測しやすいことから、太鼓の形状の特徴である円が多く用いられていると考えられる。

しかし、太鼓の音を3回鳴らして提示したのであるが、音同士の間隔も感じて形状と空間に表したものもあれば、単に太鼓の音色から受けたイメージだけを表すものなど個人によって意識を向けるところが違っていることが分かる。

図31の5歳児では、やはり赤や茶色の暖色が多く用いられている。太鼓の音は3種の楽器の中では最も音高が低く、子ども達は太鼓の音色と低い音高に強い赤系統の色を用いたと考えられる。



図29 太鼓

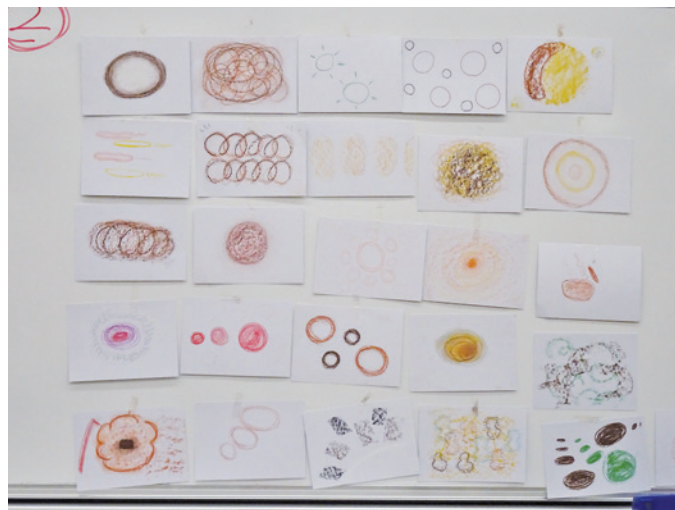


図30 学生が表した「太鼓」の音の描画



図31 5歳児が表した「太鼓」の音の描画

■ 「拍子木」の音の描画について

図33は学生たちが表した「拍子木」の音の描画で、図34は5歳児の描画である。学生の描画では色彩は焦げ茶や茶、黒、青、赤等の低中明度と、水色などの高明度に分かれた。一般には音高と明度には相関が認められることが多いため、決して低くはない拍子木の音を聞いて茶やこげ茶を用いているのは音源が拍子木であると判断して、木の概念色から茶系を選定しているとも考えられる。形では、拍子木の音は鉦と比べると音の長さが短く、残響が少ないことや音質の硬さから、線や四角形が多くみられる。しかし長い長方形型はこれも拍子木の形状を擬えている可能性がある。

対して図34の5歳児の描画では、定型の形に異なる配色を施すことによって音の違いを表現しているものを除くと、拍子木の形状ではなく硬い拍子木の音質を硬い矩形や三角形で表わしており、音そのものの印象の違いを形で表現している。学生のように拍子木を知らないことで、視覚表象から自由に音そのものに意識を傾けていることが分かる。



図32 拍子木

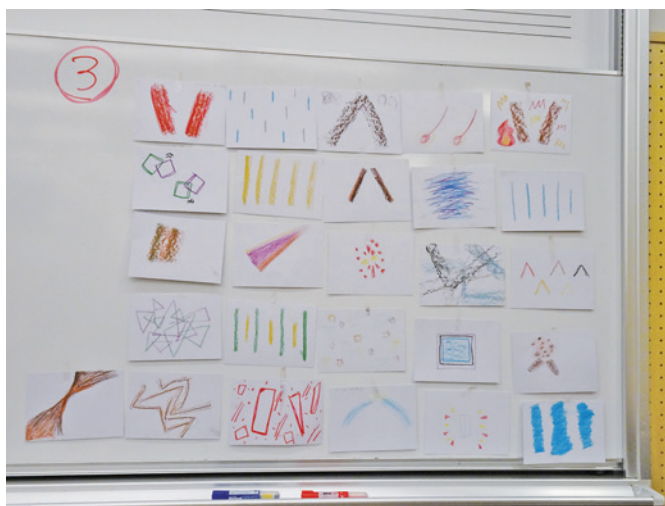


図33 学生が表した「拍子木」の音の描画



図34 5歳児が表した「拍子木」の描画

4.2.3 考察—学生の学びや気づきについて

学生たちは音を描く授業より、何を感じ、どのような学びや気づきを得ていただろうか。振り返りシートの学生の記述には、「音を描く試みについて感じたこと」「クラスメイトの表現に対して感じたこと」「子どもの表現に対して感じたこと」「和楽器について」などが挙げられている。それらを以下の表4～6にまとめた。

(1) 音を描く試みについて

学生の記述には表4のような感想がみられ、「難しかった」と感じた学生(①～③)がいる一方で、楽しい、面白いと感じた学生もみられた(④～⑪)。また、体験を通して音に対するイメージや感性についての気づきを得られていた(⑫～⑯)。

(2) 他者の表現について

すべての描画をホワイトボードに貼りつけて皆で見合ったことにより、学生たちは他者との表現の共通点や違いなどに気付くことができていた(⑰～⑳)。また、子どもたちの表現についての気づきも認められた(㉒、㉓)。

(3) 和楽器について

この度の授業では既知の楽器の音に対する先入観を持つことの無いようにとの理由から、これまであまり触れていない和楽器を用いた。授業では、音を描くだけでなく、楽器に触れて音を鳴らすことや、口唱歌という和楽器の学習法も説明したので、それに対する感想も述べられていた(㉔～㉘)。新たな幼稚園教育要領には、「我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」「我が国の伝統的な行事」、「わらべうた」、「伝統的な遊び」などの文言が示され、身近な文化に根差した素材を活用した保育のあり方が

表4 「音を描く試みについて」の学生の感想と気づき

<p>① 音を描くでは思ったよりも表すのが難しく、特に拍子木の表現で悩みました。</p> <p>② 音だけを聴いて色や形で表現することは難しかったです。</p> <p>③ 「音を描く」ことでは、鳴っているものを描くのではなく、音そのものを描くというのがとても難しく感じました。</p> <p>④ 感じた音のイメージから色を探すのが楽しいと感じました。</p> <p>⑤ 最初に楽器の音を聴いたときに、楽器の名前を思い浮かべてしまい、なかなか形が出てきませんでした。しかし、ふと無心になったときに、ポワッと浮かんできて音に形があると感じられました。</p> <p>⑥ コンテパステルでの音の表現に初めは難しさを感じたが、慣れると自分の感じたままを直感で表現することが出来ました。</p> <p>⑦ 目を閉じて音を聴いてみると音のイメージが浮かび上がって絵にすることが出来ました。</p> <p>⑧ 描いている人の数だけ表現があり、面白い、楽しいと感じました。</p> <p>⑨ 楽器の違いにより受ける印象が異なり、それぞれの特徴を絵に表しているのが興味深かったです。</p> <p>⑩ 鋭い音や丸い音、硬い音など、目を閉じて音を聴くと様々なイメージが浮かびました。</p> <p>⑪ 「音を描く」というと難しそうに思えたけれど、実際にやってみると直感で手を動かして、色をつけて、思った以上に興味深く取り組みました。</p> <p>⑫ 見たものや聞いたもの、感じたものによって音のイメージが作られていることに気づきました。</p> <p>⑬ 20歳前後の私たちも5歳児もそれぞれにイメージを確かに持っていることが分かりました。</p> <p>⑭ 色や形に傾向が見られるのは、私たちはすでに聴いたことがあったり、似た音を知っていたりして、イメージがついてしまったり、どんなものから音が鳴っているかの想像ができたりするからではないかと思いました。</p> <p>⑮ 音に対して自由な発想を持ち、それを広げていくことが大切であることを学びました。</p> <p>⑯ 同じことを小学生の時にもやったことがあり、その時はすらすら描けた記憶があるので、柔らかい感覚を持つことが大切だと感じました。</p>
--

表5 「他者の表現について」の気づき

<p>⑰ 同じ音を聴いたはずなのに、1つとして同じ絵はなく、色やぬり方で多様で興味深かったです。</p> <p>⑱ 思っていたよりも絵に違いがあり、面白く感じました。</p> <p>⑲ 高い音はほとんどの人が黄色を使っていて、共通していたことが興味深かったです。</p> <p>⑳ 太鼓の音は、丸っこい音がぼんぼんとあるような絵が多かったけれど、使っている色が様々でした。拍子木の音は、尖った形が多く、それぞれに共通する感じ方があるのだと思いました。</p> <p>㉑ 鉦に黄色を選ぶ人が多い、太鼓は丸くて柔らかいような表現が多い、茶系の暖かい色が使われる、拍子木には尖った形が多いなどの共通点が見られました。</p> <p>㉒ 音に対して、決まったイメージを持たない状態で聴くのは、小さい子どもの方が得意なのではないかと思いました。</p> <p>㉓ 子どもたちの絵を見て、私たちよりも表現力が豊かでイメージに縛られていないと思いました。</p>
--

表6 和楽器について

<p>㉔ 生まれて初めて触れる楽器ばかりでした。</p> <p>㉕ 和楽器を初めて触ったけれど、リーンとなる鉦や、太鼓のようにポンポンと鳴るものなど、豊かな音色でいいなと思いました。</p> <p>㉖ 福岡の自分の郷里のお祭りの音楽（博多どんたく）を調べてみたくなりました。</p> <p>㉗ 日本の楽器には、楽譜ではなく口唱歌という学び方があることを初めて知りました。</p> <p>㉘ 口唱歌を唱えることで、音の形がはっきりと分かりやすくなったと感じました。</p>

求められている。2020年度からの新教育課程では、保育者としての資質や技術、能力を高めるために和楽器を用いたさらなる表現活動を検討する必要があると考える。

5. まとめと今後の課題

本研究では、音・形・色を関連づける表現プログラムについて、「児童図工Ⅰ」と「保育内容演習（音楽表現）」の2つの授業から、日本語と和楽器を用いた内容を取り出し、描画表現と振り返りシートをもとに学生の得た学びと気づきについて考察した。音・形・色が関連する表現教育については、近年、初田・井上（2013）が小学3年生、大学生や幼稚園・小学校・中学校の教員を対象としてトーンチャイムとスプリングドラムの音を鉛筆で描くことを試みた研究¹²⁾や、奥（2016）が5歳児を対象に電子ピアノの音（イ音から2点ト音まで半音を省いた14音）からイメージした色を、24色のパスを指差して示すことを試みた研究¹³⁾などがなされている。

筆者らはこれまでの共同研究の積み重ねを踏まえて授業を検討したが、特に混色について「児童図工Ⅰ」での学びが「保育内容演習（音楽表現）」での音の描画表現に十分に活かされていなかった点は改善が求められる。授業内容に関連性が認められるにもかかわらず、同一科目ではないために教員間で密に話し合うことが叶わず、和楽器の音を描く時に既習の混色の知識や能力について適切な助言を与えることができなかった。

また、幼稚園で『かっきくけっこ』を題材に行った実践では、子どもたちが発声時の声の長短や強弱、速度の違いを感じて、その違いを身体による動きに表わす遊びを試みたが¹⁴⁾、その成果を授業に生かす時間を確保できず、音・形・色を関連づける体験に留まって、動きとの関連に対する気づきには至らなかった。

しかしこれらの課題は、2020年度から新教育課程における「保育内容演習（表現）」が開始されることにより音楽専門の教員と造形専門の教員が両名で担当できるため、解決されると考えている。これまでに本学では、学科と領域を超えた音楽と造形の研究連携の基盤が全国でも先駆的に構築されている。保育内容の統合による授業時間の縮小という制約は否めないが、既にある協力体制のうえに、より綿密な授業計画を実現し、音楽的・造形的・身体的表現の関連を重視した授業内容によって学生の表現力を豊かに広げられるように取り組みたいと思う。

注

- 1) 無藤隆代表 保育教諭養成研究会編『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』萌文書林、2017年
- 2) ①山野てるひ・岡林典子・ガハプカ奈美「音楽と造形の総合的な表現教育の展開—保育内容指導法（表現）の授業における『音環境を描く』試みから—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第6号、2010年、pp. 47-59 ②岡林典子・ガハプカ奈美・山野てるひ「感性を育む表現教育のプログラム開発—『楽曲を描く』課題を中心に—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第8号、2012年、pp. 139-148 ③平成23-26年度 学

- 術研究助成基金基盤研究（C）研究成果報告書 課題番号23531270 「保育士・教員養成課程における幼保小連携を踏まえた表現教育カリキュラムの開発」（研究代表者：山野てるひ）④平成25-28年度 学術研究助成基金基盤研究（C）研究成果報告書 課題番号25381279 「幼小連携を連携をふまえた音楽教育プログラムの開発」（研究代表者：岡林典子）
- 3) ①古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的要素を使った教授法Ⅰ—保育実践教科書を分析する—」『東邦学誌』第44巻第2号、2015年、pp. 91-110 ②古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的感覚を使った教授法Ⅱ—授業実践を通して—」『東邦学誌』第45巻第2号、2016年、pp. 37-56 ③古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的感覚を使った教授法Ⅲ—造形表現の授業の分析を通して—」『東邦学誌』第46巻第1号、2017年、pp. 57-80
 - 4) 小島千か「大学の教養教育における「音楽」と「美術」の連携—音楽の視覚化を中心に（特集 音楽科と他教科との連携—何を拓くためにどの教科とどのように連携するのか）」音楽教育実践ジャーナル 8（2）、2011年、pp. 62-69
 - 5) 花輪充「指導者に必要とされる表現教育のパラダイム転換：保育者養成における表現教育の問題／方法論をめぐって」東京家政大学教員養成教育推進室年報、2巻、2016年、pp. 15-24
 - 6) 前掲書1）p. 20
 - 7) 山野てるひ・岡林典子・水戸部修治編著『幼・保・小で役立つ 絵本から広がる表現教育のアイデア—子供の感性を豊かに育むために—』一藝社、2018年
 - 8) 前掲書7）p. 170
 - 9) 谷川俊太郎作・堀内誠一絵『かっきくけっこ』くもん出版、2009年／五味太郎作『るるるるる』偕成社、1991年／うしろよしあき作・もろかおり絵『ぱっぴぷっぺぼん』ポプラ社、2014年
 - 10) 浜野祥子『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』くろしお出版、2014年
 - 11) 岡林典子・佐野仁美・坂井康子ほか「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ和楽器を用いた活動の試み」京都女子大学『発達教育学部紀要』第15号、2019年、pp. 109-119
 - 12) 初田隆・井上朋子「音をかく活動の研究」美術教育学 第34号、2013年、pp. 407-418
 - 13) 奥美佐子「子どもの音の描画表現と読み取りの研究」神戸松蔭女子学院大学研究紀要、人間科学部編5巻、2016年、pp. 55-60
 - 14) 前掲書7）pp. 10-13

※本研究はJSPS（課題番号17K04889代表者：岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発」）の成果の一部である。